



BERNI MOTORI **FACTORY VISIT**

アバルトと生きた40年

イタリアでヒストリック・アバルトのパーツ販売やレストアを行っている
スペシャルショップといえば、ベルニ・モトーリがその筆頭として挙げられるだろう。
同社を率いるアンソニー・ベルニさんは、40年間、アバルトと共に生きてきたと言っても
過言ではないほど愛情を持ってアバルトと接しているが、それはいかにも状態のいい
アバルトがズラリと並ぶこの場内の写真を見るだけでも、十分に伝わるのかもしれない。

text: Masayuki MORIGUCHI (森口将之) photo: Satoshi KAMIMURA (神村 聖)
取材協力: FCAジャパン (phone: 0120-130-595)



『ベルニ・モーター』の名はアバルト、特にヒストリック系を長年所有している方は、一度は耳にしたことがあるだろう。ミラノからは南西のマレーオという小さな町にある、アバルト専門のスペシャルショップだ。多くのヒストリック・アバルトのパーツをストックし販売するほか、パーツ自体を製作したり、レストアのオーガナイズを行ったりしている。2019年でちょうど40周年となり、現在68歳のアンソニー・ベ



ルニさんは、40年に渡りアバルトと共に生きてきた。彼は自身の経歴を振り返りながら、なぜアバルトかを語る。

「私はイギリス人なのですが、祖父母がパルマ出身ということもありイタリアに移住しまして、最初の2年間はフェラーリに勤務しました。英語を生かした海外から部品を調達する仕事です。ボートメーカーのリーヴァに1年勤務したあと、個人でランチア、アルファロメオ、マセラティなど昔のパーツ販売を個人で始めました。そんなある時、ミラノの工場から大量のアバルトのパーツが出てきたんです。そして2月に2mくらい雪が積もった日のこと。彼は私のところへやってきて、そのほとんどを買っていきました。私は当時、アバルトの価値をよくわかっていなかったのが驚きました。ドイツ人の彼はレオ・アムラーさんといい、スイスのエンゲルバード・ムルさんと並んで、世界の2大アバルト・コレクターと呼ばれています」

そのムルさんは最近コレクションを売却し

たそうだが、実は売却前にベルニさんは当時FCAトップの故セルジオ・マルキオンネさんへその一括購入を勧めていたが、叶わなかった……という話は余談である。そして。

「後日アムラーさんに呼ばれて、彼のガレージに行きました。扉を開けるとすごい数のアバルトが並んでいたんです。これが、私がアバルトに恋した瞬間でした。ひと目惚れしたクルマですか？ ほとんどなのですが(笑)、スポーツプロトタイプ1300プレスポルトですかね。以来、アムラーさんとは長年、ずっと友人関係を続けています」

最初は家の倉庫で始めた部品販売だが、徐々に規模が大きくなり、現在の場所に移転したのは1996年のこと。ところで自身でもア

HISTORIC
 **ABARTH**
 BERNI MOTORI
 FACTORY VISIT



ベルニ・モーターはパーツ販売、製作のほかにレストアのオーガナイズを行っており、ここを起点にそれぞれの作業場所に向かう。ベルニさんの周囲にはイタリアの優秀な職人がたくさんいるのだ。なお取材時に場内に置かれていたアバルトはベルニさんの車両と預かっている車両が混在していたが、いずれも“過度な”レストアを受けたものは1台もなく、アバルトのサービスカーである1989年式フィアット9000パノラミカを含め、自然ないかにも状態のいいものばかりであった。ベルニさんが横に立っているのは、自身のクルマの中でもお気に入りの1955年式207/Aポアーノ。奥には1970年式1000TCRの姿も見える。1階がショールームおよびオフィス、2階がパーツ倉庫。

HISTORIC
ABARTH
 BERNI MOTORI
 FACTORY VISIT



2階は様々なパーツをストックする倉庫となっている。もちろんネットでも購入できる。ちなみにベルニさんが最初にしたのはアバルトのオイルパンで、かつてはマグネシウムだったが、環境やコストの関係で現在はアルミ製とのこと。



1階のショールームでは様々なヒストリック・アバルトのパーツが実際に展示されていて見ているだけで楽しい。床はチェッカーフラッグ柄で、いかにもアバルトらしい雰囲気。



過去の雑誌や資料も数多く所有しており、レストアの際に参考としている。知りたいことがあれば、有料だが調べてもらうことも可能。右はベルニさんと一緒に切り盛りする息子さん。

「ひとつひとつが挑戦でしたが、それができたのはアバルトが好きだったからです」

バルトを所有しているのだろうか？

「はい、最初は1000TCを買ったのですが、ひどい状態でした。その頃、1980年代前半でもアバルトの部品を探すのは大変で、ならばと、オイルパンを自分で作ったところ欲しいという方が多く、販売したらみんな喜んで頂けたんです。正直大変でしたが、そこからいろいろなことが始まりました。ひとつひとつが挑戦でしたが、それができたのは私がアバルトが好きで、情熱があったからです。そして重要なのは私の周囲にイタリアの優秀な職人がたくさんいることです」

こうしてアバルトのパーツ販売、製作で業界屈指となるベルニ・モトリーが確立されていくわけだ。ではベルニさんに改めて、アバル

トの何が好きかを訊いてみた。

「アバルトは小さくて可愛らしい中に魅力が詰まっています。最初は25psの600がベースだったのに、850TCや1000TCを経て、最後は100ps以上の1000TCRになりますからね。カルロ・アバルトさんには会ったことはありませんが、彼の時代のクルマが好きです。私はそんなアバルトを長年支えてきました」

「そういう人はたくさんいますか？」と聞くと「アバルトだけというのは私だけかも」と静かに呟いたベルニさん。そんな彼だから、21世紀のアバルト復活は心より嬉しかった。

「プリント・アバルトを買いました。22万km乗りました。これはずっととっておきます」

いかにも状態のいい場内のアバルトたちを

見れば、ベルニさんがいかにアバルトに愛情を注いでいるか一目瞭然。どうやらアバルトとの"恋愛"はまだまだ続きそうである。



INFORMATION

Berni Motori

Address: Via Monte Vioz 7, 26847 MALEO (LO) Italy
Phone: +39(0)377 589138
HP: <http://www.bernimotori.com/>

ABARTH LOGO HISTORY

スコーピオンロゴの変遷

ヒストリック・アバルトを見ていると、エンブレムの違いが気になることが多い。
"これは先日見たクルマとデザインが違う……"といった具合に。
前ページでご紹介したベルニ・モーターにエンブレムのストックがあったので、
これはいい機会だと順番に並べて頂き、その使用年を教えてください。
文中にもあるとおりこれが全てではないが、その違いを愉しんで頂ければ幸い。

*text & photo: Daisuke HIRAI (平井大介) coordinate: Yuko NOGUCHI (野口祐子)
special thanks: Berni Motori*

様々なヒストリック・アバルトのパーツをストックするベルニ・モーターだから、もちろん過去のエンブレムもひと通り所有していた。そこで全てではないが、あるものだけ年代順に並べて頂いたのがこの写真だ。

さすがに1971年以降、フィアット傘下となって以降のエンブレムは"ABARTH"の書体を除けば現在のものに近いが、それ以前はメイ



1949-1950



1961-1965



1966-1968



ンのサソリのイラスト自体もだいぶ違うことに改めて驚く。最初はかなりリアルなものだったが、ロゴらしくデフォルメされていくのだ。書籍『アバルト・ザ・スコーピオンズ・テイル』には1966年にデフォルメしたサソリを設計した図面が掲載されていて、実はここにはないが、同年からそれが採用されている。またその色は"ROSSO"、"GIALLO"といった具合に書か

れており、"〇〇ROSSO"のように正確な色は指定されていない。

ちなみにアバルト70周年のロゴは、右上の1954年から使用しているものがベースとなっており、本書の表紙は上段真ん中の1949年、創業の年から5年間使用したものを参考にした。70周年ロゴ誕生の経緯は取材していないが、恐らくはこちらのサソリのほうがロゴ化

しやすかったのであろう。

こうしてエンブレムひとつとっても様々な歴史があるのは興味深いところだが、アバルトに限らずイタリアは資料を正確に残すお国柄でもないの、正直調べものでは躓くことも多い。しかしベルニ・モトーリのようにこうしてちゃんと伝える人がいるのも、ある意味でイタリアらしい部分に感じた。

HISTORIC

ABARTH
ABARTH LOGO HISTORY

